



筑紫女学園大学リポジット

European Ballad Culture from Japan : Georges Bigot's Yokohama Ballads

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮原, 牧子, MIYAHARA, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/980

日本発バラッド文化

— Georges Bigot の *Yokohama Ballads* —

宮 原 牧 子

European Ballad Culture from Japan
— Georges Bigot's *Yokohama Ballads* —

Makiko MIYAHARA

筑紫女学園大学研究紀要 第14号別刷

2019年1月

福岡県太宰府市石坂

Reprinted from *Journal of Chikushi Jogakuen University*

No. 14, pp. 53 – 65, January 2019

Ishizaka, Dazaifu-shi,

Fukuoka-ken, Japan

日本発バラッド文化

— Georges Bigot の *Yokohama Ballads* —

宮 原 牧 子

European Ballad Culture from Japan
— Georges Bigot's *Yokohama Ballads* —

Makiko MIYAHARA

フランス人画家 Georges Bigot (1860-1927) は1882年に来日し1899年に帰国するまでの17年間、居留地に住む外国人や欧州に向けて、日本の風習や文化、またそれらが急激に西洋化していく様を、時に愛情深く、時にユーモラスに、時に辛辣に、画や文章に残した。1892年に発表された *Yokohama Ballads* は、¹諷刺画にフランス語なまりの英語の詩が付されたものであり、その様式は英国でブロードシートに印刷され売られたブロードサイド・バラッドを彷彿とさせる。語り手の英国人や米国人が日本の変わり様を嘆く6編の詩は「バラッド」と題されながらも、形式はいわゆる英国バラッドのそれとは異なる。しかし、その内容は英国のブロードサイド・バラッドに極めて近い。本論では、日本を舞台にフランス人画家が書いたバラッドの英国ブロードサイド・バラッド的性質について検討するとともに、バラッド文化とその定義の広がりについて考察する。

I. ジャーナリストとしてのビゴー

ビゴーは‘Painter and watercolourist, copperplate engraver, illustrator, caricaturist, war correspondent, photographer, editor and humorist’ (Polak and Cortazzi 3) と、様々な肩書を持つ。1860年パリに生まれたビゴーは、12歳で国立美術学校に入学するも、その4年後には家計を助けるために退学し、新聞や雑誌等の画の仕事を引き受けるようになった。フランスの1830年ごろの識字率は約46%、その後初等学校が設置されたものの、1847年において65%程度と低かったため(岩崎 170)、挿絵入り新聞の需要が高かったのだという(柳澤 4)。パリ時代にビゴーが特に大きな影響を受けたのは、Gustave Courbet (1819-77) や Honoré-Victorin Daumier (1808-79) や Victor Hugo (1802-85) であったが、²特に諷刺画家ドーミエの影響は大きい。³日本においてジャーナリストとして諷刺画を描くことは、ビゴーにとってごく自然な行動であった。来日後間もない1882年7月には既に Charles Wirgman (1832-91) が主催する *The Japan Punch* に、「諷刺画を描くビゴー」を「諷刺」する画が紹介されている(ワグマン 237)。

清水は日本の漫画について「漫画が真に民衆のものになるのは、ジャーナリズムの中に発表の場

を得てからである」(清水『漫画の歴史』ii)と主張しているが、欧州においても同様の事情があった。諷刺画の歴史は18世紀英国の William Hogarth (1697-1764) の銅版画にまでさかのぼるが、漫画が真に民衆のものとなったのは、漫画家でジャーナリストの Charles Philipon (1800-61) が1832年にフランスで創刊した諷刺新聞 *Le Charovari* 以降である。1841年に英国で創刊された *Punch, or The London Charivari* は、その名の通り、この『シャリバリ』をモデルに創刊されたものである。⁴ ドーミエはフィリポンが『シャリバリ』の2年前に創刊した諷刺新聞 *La Caricature* や、その前年に Charles Ratier らによって創刊された初の漫画新聞 *La Silhouette* などにも諷刺画家として参加していた。彼の影響を色濃く受けたビゴーもまた、明治日本の政治・社会・風俗を記録し続けた。結果、酒井が「絵筆のカメラマンとしてのビゴーの仕事は、いまに至って眺めてみると、絵になった小気味のいい『日本人論』でもあって、すべて貴重な記録となっている」(酒井 155) と述べるように、ビゴーは歴史書には記録されることのなかった日本人の歴史を、後の時代に伝えている。

来日後ビゴーは国内外の様々な新聞・雑誌に寄稿する一方で、⁵自ら諷刺雑誌を主催した。⁶

1. 『TÔBAÉ』(第一次：1884年12月1号のみ、1887年から1889年まで月二回刊行、全69号、スポーツ版『TÔBAÉ SPORT』1889年)

居留地外国人を対象に発行された時局諷刺漫画雑誌。内容は国内外の政局や日本の風俗など。特に初期においては、条約改正が時期尚早であることや日本のドイツ志向に対する警鐘、ジャーナリズム弾圧への反対、などを訴えた。中江兆民らと協力し、15号以降は日本文が入る(1888年10月、41号まで)が、自由民権運動終焉後は、居留地の人々の生活スケッチが中心となる。

2. 『Potin de Yoko』(1890~91)

不定期刊行。各号テーマあり。条約改正を支持していた「ジャパン・メール」紙を批判するなど、『TÔBAÉ』風の時事問題を扱った諷刺雑誌。

3. 『Le Potin』(1893-94)

月刊。横浜と神戸で同時発売。大阪ユニオンクラブ、京都ホテル、東京ホテルなどでも取り扱う。第1シリーズは8号まで、第2シリーズは6号まで確認されている。時事問題や居留地内の事件を諷刺。

4. 『La Vie Japonaise』(第一次：1890、第二次：1898-99)

「日本風俗絵入新聞」という日本文タイトル入り。月二回刊行(後に月一回)。ビゴー日本滞在の総決算的な雑誌。日本の風俗習慣の紹介。コンテによる風俗画、当時の日本では珍しい数コマからなる風俗漫画が中心。

諷刺画とブロードサイド・バラッドには多くの共通点がある。日本人による「ポンチ絵」について茂木は次のように分析している。

何が描かれているかを読み解く「判じ絵」の性格を「ポンチ」絵は持っていた。そのため、読み解きのための知識と時間が必要で、その余裕のある人たち読者は限定されていた。したがっ

て、掲載媒体の読者層が拡大し、かつ現実の出来事を即座に伝えるという「報道」が徐々に求められるようになる1870年代から90年代初めにかけて、「ポンチ」絵は文字の役割が低下し、視覚に訴えるヴィジュアル化が進むことになった。いいかえれば、「読んで、聞いて、見てわかる」から「すぐ見てわかる」ものへの変化が諷刺画としての「ポンチ」絵に生じたのである。
(茂木)

ポンチ絵が誰が見ても解る身近なメディアであったように、ブロードサイド・バラッドもまた、誰もが知る'tune'にのせて歌われたり、挿絵が(尤も、詩とは無関係の画が掲載されることも多々あったが)入ったりすることによって、英国で識字率の低かった16世紀から、文字を介さず情報を伝達することが可能なメディアであり、日常の一部であった。Skeaping が'[t]his was very much an urban means of expression, a form of mass communication before the days of newspapers and magazines, and all human life was here' (6)⁷と述べているように、ブロードサイド・バラッドは正に日常の一部であった。諷刺画が大衆の日常を後世に伝える手段であったのと同様、ブロードサイド・バラッドもまた、歴史書が記録しない人間の歴史を伝えるものである。⁸

II. バラッドとバラード

清水は *Yokohama Ballads* について「条約改正交渉の成り行き次第では居留地がなくなる現実に直面した外国人の不安・不満が語られ、ビゴアの焦燥感も表紙絵に暗示されている」(清水『明治の面影・フランス人画家：ビゴアの世界』152)と述べている。条約改正等によって居留地での生活が難しくなっていく状況は、在日外国人全体にとっても、ビゴア自身にとっても、大きな不安であり、関心事であった。*Yokohama Ballads* にはビゴア自身の嘆きがうたわれており、その点はいわゆるフランスのバラード的であると言えよう。*Yokohama Ballads* 表紙の悲壮感溢れる人物画について清水は、「ふんどしの男は富士山麓で日本人女性と裸一貫の生活をしているビゴア自身であろう」と指摘している(清水『ビゴアが見た日本人』40)。

本論の目的の一つは、ビゴアの6編の詩の英国ブロードサイド・バラッド性を主張することにあるわけだが、そもそも英国バラッドとフランスのバラードには多くの共通点があり、*Yokohama Ballads* には両者の要素があって当然である。鈴木信太郎は次のように主張している。

フランス語に於いてバラッド ballade という単語は、二つの意味に使用されている。一つは厳密な詩形を指示する語として使用され、... 他の一つの意味は、厳密な詩形ではなくて、romance (恋歌) とか chanson (唄) とか élégie (哀歌) とか légende rimée (詩物語) とかと殆ど同意語であって、英語の ballad, ドイツ語の ballade, スペイン語の balada 等と同じ意味である。
(287)⁹

鈴木によると「厳密な詩形」とは、「イ、三つの詩節 couplets (strophes) と一つの半詩節である

反歌 envoi によって構成されていること」、「ロ、各々の詩節が同一の脚韻 (rimes) を踏み、反歌の半詩節の脚韻は詩節の後半の脚韻であること」、「ハ、各詩節及び反歌の最後の詩句 vers 一行が、皆繰返句 refrain となっていること」(鈴木 293-94) であるが、ビゴアのバラッドはこのいずれの条件も満たしていない。

Yokohama Ballads の 6 編の詩は、厳密な意味でフランスのバラッドではない一方で、厳密な意味で英国バラッドの形式をとってもいない。しかし、Friedman は英国のブロードサイド・バラッドの源流はそもそもフランスの 'balade' であったと指摘する。

Poetry of a topical or edifying nature, and usually cast in the ballade stanzas, was printed on broadsheets as a ready means of influencing public opinions and morals, or perhaps merely as a convenient mode of publication. These prints and the poems inscribed on them came to be known as "ballades," "ballets," "balets," and eventually "ballads" because the first poetry published in this fashion was written in the stanza forms associated with the naturalized versions of the French *balade* (Friedman 44)

バラッドの文化を持つフランス出身のビゴアが、英国のブロードサイド・バラッド風の作品を書くことは、決して自国の文化とかけ離れた行為ではなかったのだと言える。

何よりここで注目すべきは、ビゴアの *Yokohama Ballads* がいずれも時事問題に関わる社会・風俗風刺となっていること、そしてわざわざ英語で書かれているということである(ビゴアの作品中、英文が付されたものはこれ以外に無い)。ビゴアは来日し、「パリで夢見た浮世絵に描かれた世界は、庶民生活の中に生き続けていたことを発見」(清水『ビゴアが見た日本人』15-16) したというのが、追及するテーマの一つが「下層階級の人々の生活」(清水『ビゴアが見た明治ニッポン』11) を描くことであったジャーナリスト・ビゴアの視線は、すなわちブロードサイド・バラッド的視点であったと言えるのである。

Ⅲ. 6 編のバラッド

以下、6 編のバラッドについて、それぞれのブロードサイド・バラッド的要素、英国的要素、および内容について検討する。

1. "Over Educated." 「過剰教育」

Yokohama Ballads の冒頭を飾るのは、日本の行き過ぎた西洋化を嘆くバラッドである。このバラッドには、次の前文が付されている。

On the Bund a few days ago a Japanese rickshaw-man called an English salt who failed to see the sweet reasonableness of paying him six times his legal fare a "ruddy-tinted fool." A

Chinaman thereupon walked up and remonstrated saying that such an expression was “belly rude.” A *propos* of this incident Fiasco da Gama, naturalized Britisher, delivers himself thusly:

— 10

数日前海岸通りで、一人の日本人の人力車夫が、英国人水夫を「赤ら顔の馬鹿野郎」と罵った。この水夫が「法定料金の6倍の乗車賃を払わねばならない」という、かの麗しき理屈を見落としたためである。そこに一人の中国人がやって来て忠告した。その言い方は「クソ失礼」と。この事件について、英国に帰化したフィアスコ・ダ・ガマ氏はこう主張する—

最後の一文で、本作の語り手であるフィアスコ・ダ・ガマ氏は「英国に帰化した」という情報がわざわざ付されており、その英国人が「事件について語る」という、ブロードサイド・バラッド的な状況が作られている。

語り手は、西洋化した日本人は英語で英国人を罵るが、元来礼儀正しい日本人には似つかわしくない、しかも、中国人が日本人に礼儀云々を語るのは筋違いだと主張する。

The wurrust that they can go is call you *baka*;
(The Chelsea sage says most are fools unmixed);
But I've dropped across a cuss who'd madden Shaka:
He called me fool with somethin' strong prefixed (ll. 17-20)

怒りが頂点に達するとニッポン人は「馬鹿」と言う
(かのチェルシーの賢人も言ってるじゃないか「大抵の人間は正真正銘の馬鹿だ」って)
お釈迦さまをも怒らせる不屈き者を叱りつけたら
そいつは私に「馬鹿」と言った 何やら酷い言葉を「馬鹿」の前にくっつけて

ビゴーは *Yokohama Ballads* 中の作品を英国的なものとするために、多くの工夫を凝らしているが、その一つは作中の引用の多くを英国の詩人や著述家のものにしていくことである。引用2行目の「チェルシーの賢人」とは英国の評論家 Thomas Carlyle (1795-1881) を指し、元になったのは、‘the twenty-seven millions, many of them fools’ (Carlyle 98) という、カーライルが著作の中で何度も繰り返したフレーズである。

語り手は、「汽車」や「テレグラフ」や「ライフル」や「ダイナマイト」や「軍艦」や「山高帽」や「ランプ」や、その他何もかも日本人に教えてきたが、もし日本人が「英語の罵り言葉」までも自在に操るようになったら、もう英国人の居場所はないと嘆く。

2. “Ballad of a Company.” 「ある会社のバラッド」

B氏が務める新聞社の経営者たちはお遊び感覚で事業を起こし、案の定失敗する。会社を倒産さ

せた経営者たちに対するB氏の批判の詩であるが、作品の出だしには英国においてバラッド同様に口承歌として発達した Nursery Rhymes に似た軽快さがある。

*Half a hundred gentlemen sobered down and sane;
Half a hundred gentlemen in dire financial pain;
Half a hundred gentlemen all rueing sore the day
They tinkered up the old Gazette to pipe their bloomin' lay!*

They got up a Company to slay the piebald *Mail*;
They meant to buy the *Herald*, but their plan they quickly shifted . . . (ll. 1-6)

五十人のジェントルマン 酔いが覚めて正気に戻る
五十人のジェントルマン 金に困って悲嘆に暮れる
五十人のジェントルマン みんな揃って後悔する
古き良きガゼットをいじくり回し 景気のいい歌を吹こうとした

奴らは混血メイルを倒そうと会社を立ち上げ
ヘラルド買収を目論むも すぐに計画を変更した

「ガゼット」、「メイル」、「ヘラルド」は、当時、横浜三大英字新聞と呼ばれていた。「ガゼット」は、スコットランド出身の John Reddie Black (1827-80) によって1867年に創刊された *The Japan Gazette* を指す。ブラックは元々「ヘラルド」の主筆を務めていたが退社、その後「ヘラルド」に対抗して「ガゼット」を立ち上げたという経緯がある。「ガゼット」と競争するため、「ヘラルド」はそれまで週刊であったのを毎夕刊に変更したのだという(蛭原 69)。*Yokohama Ballads* に付された画には、倒産した「JAPAN GAZETTE ○○○」の看板が足下に置かれている様が描かれている。¹¹『日本欧字新聞雑史』には、「ガゼット」は「明治二十五年夏頃、一時廢刊の噂を立てられたこともある」(蛭原 212) という記録が残っており、ビゴーはこの時の噂を題材とした可能性がある。「メイル」は *The Japan Mail* を指す。1870年に *The Japan Times* の利権を譲渡された英国人 William Gunston Howell (1829-?) によって、週刊・日刊・隔週刊形式で刊行された(鈴木「幕末・明治期の欧字新聞と外国人ジャーナリスト」)。特に日本政府と提携していたハウエルの時代と大の日本最頂であった Francis Brinkley (1841-1912) が主筆であった時代は、親日派新聞として知られていた(蛭原 91-92)。「混血の」という意味を持つ 'piebald' という形容詞は、そんな英日の親密ぶりを反映しているのだろう。「ヘラルド」は、1861年6月に長崎で *The Nagasaki Shipping List and Advertiser* を創刊した英国人 Albert William Hansard (1821-66) がこの年の11月に拠点を横浜に移し、改題して発行した *The Japan Herald* を指す。

また、ビゴーはこの作品においてもシェイクスピアを取り上げ、作品に英国性を付加している。¹²

さらに、新聞社の倒産が確定したことをうたう6連目では、‘Guess they’ve learned that publishing is more’n school-boy’s play! / Fancied that a newspaper could be run by steam; / With their Priestman’s engine spoiled good paper by the ream’(ll. 52-54) (奴らにも出版業が子どものお遊びじゃないって分かったんだろう / 蒸気で新聞が出せるとでも思っていたんだろうが / プリーストマン社製エンジンで何百枚という紙を無駄にしたら)と、1870年に創業した英国のエンジン会社、Priestman Brothers の名を出す念の入れようである。

3. “Them Companies!” 「会社というやつは」

会社が倒産しても、経営者は従業員の生活を守るために一銭たりとも出そうとしない。前作同様、経営者批判のバラッドであるが、本作は横浜だけでなく、神戸の倒産事情についても触れている。2行目から4行目までは、‘When Companies are bustin’, and Banks are goin’ bung, / An’ share quotations fallen to freezin’ point, / An’ Exchange is two an’ tenpence, an’ poor Silver’s dirge is sung. . . .’(会社が倒産するとき 銀行が破綻するとき / 株価は氷点にまで下がるもの / 手数料は12ペンス 哀れシルバーの哀歌が聞こえる) とうたわれているが、この「哀れシルバー」とは当時日本で未だ採用されていた銀本位制を指していると思われる。日本は1878年に金本位制への変革を布告したにも拘らず、実際には「金貨をもって本位するという『新貨条例』による変則的な金本位制から金銀複本位制になり、さらに政府紙幣、銀行券を銀貨とのみ交換するという銀本位制に移っていった」(岡田 31)。ところが欧州を中心に銀の価格が下落した。1871年にはロンドンにおいて1オンス60 1/2ペンスであったが、*Yokohama Ballads* 出版の1892年には39 3/4ペンスに下落(岡田 30)、これは前年度から約6ペンスの急落である。ちなみに、米国において金本位制を推し進めたのは William McKinley (1843-1901) であり、次の作品にも登場する。

この作品で最も興味深いのは最終連であろう。

Chorus boys!

For they’ve taken my hard-won dollars, an’ I’ll never see them more,
They’ve vanished quite away like Nelly Gray;
An’ about the whole blamed business I feel uncommon
But never mind! I’ve had my little say. (ll. 22-26)

さあコーラスだ!

奴らは俺が必死に稼いだ金を盗んだ もう二度と戻らない
ネリー・グレイみたいに跡形もなく消えちまった
この忌々しいビジネスの全てが とてつもなく腹立たしい
だが気にするな 俺が何を言おうと誰も聞いちゃいないさ

‘Nelly Gray’とは、1856年に米国の Benjamin Hanby によって作詞・作曲されたポピュラー・ソング

“Darling Nelly Gray”からとったものであろう。アフリカ系アメリカ人の奴隷の男が恋人を主人に奪われるが、二人は死後天国で結ばれるという物語歌である。引用2-3行目の表現は、明らかにこの歌の“*Oh! my poor Nelly Gray, they have taken you away, / And I'll never see my darling any more ...*” (ll. 5-6) を意識している。この“Darling Nelly Gray”については、ネット上に次のような指摘も見られる。

A powerful antislavery ballad, “Darling Nelly Gray” (1855) was called “The Uncle Tom’s Cabin” of song in its day. Its account of two lives lost to slavery is at odds with the paternalistic picture of the institution promoted by its theoretical apologists at the time. The song opens as a deceptively sentimental Victorian ballad in the Stephen Foster vein, apparently mourning a lover who has died. (‘Reunion: A Musical Epic in Miniature’)

米国に多くの伝承バラッドが渡りその後独自の発展を遂げていったことはよく知られているが、この反奴隷ソングをバラッドの派生形であると捉えることができるならば、本作は米国版バラッドをモチーフに、フランスのジャーナリストが書いた、英国風ブロードサイド・バラッドという、非常に興味深い例であると言うことができる。

4. “Ebenezer Emmanuel Broadbottom, from the State of Ohio, on the Matter of the Tariff.” 「オハイオ州出身エベニーザー・エマニュエル・ブロードボトム氏、関税制度について語る」

本作の語り手は米国人である。ブロードボトム氏は人力車に乗っても、音楽劇を観に行っても、芝居小屋に行っても、富士山に登っても、日本人の数倍の外国人料金を要求される。この理不尽を、哀しみ交じりに批判したバラッドである。あるとき人力車に乗った語り手は日本人の二倍の料金を払うが、さらに「あと10セント支払え」(l. 4) と喚きたてられる。

For there’s duty here on curly hair an’ the colour o’yer skin,
There’s an impost too on them as speaks a civilized speech,
In this country you begin to think McKinley very thin,
For his tariff doesn’t chouse you as thim Haythens overreach. (ll. 5-8)

「ここでは巻き毛とお前めえのような白い肌の奴の義務なんだ」
言葉に文明開化の匂いをチラつかせようものなら 重い税が課されてしまう
この国ではあのマッキンリーでさえ高が知れてる
マッキンリー関税はこの国のようにお前から金を騙しとったりはしない

マッキンリーは第25代米国大統領（任期1887-1891年）であり、1890年にはマッキンリー関税と呼ばれる高率輸入関税を導入したことで知られている。

5. “Lemon Geranium Forsooth! (*On the Kanagawa Road.*)”

「それはまるでレモン・ゼラニウムの香り—神奈川の路上にて—」

ビゴーは過度に西洋化する日本を嘆く一方で、この作品では未だ近代化されない日本の下水処理方法を批判し、嘆いている。「まるでレモン・ゼラニウムの香り」とは、糞尿の臭いに対する皮肉である。「コレラよりも質が悪い」(l. 10)、「殺人的な」(l. 31) 肥担桶の臭いが海風によって漂ってくる。

Some folkses speak o' perfumes an' others o' sweet smells,
Of the balmy odours of Japan Sir Edwin Arnold tells;
But Sir Edwin seems peculiar in the matter of a nose,
Or, he's never been on Yoko's strand when the wind from landward blows! (ll. 1-4)

香水のようだという者もいれば 甘い香りだという者もある
エドウィン・アーノルド氏はニッポンの爽やかな香りについて語る
だが どうやらアーノルド氏は特殊な鼻をお持ちのようだ
そうじゃなきゃ横浜の海岸に行かれたことがないだろう 海から風が吹く時分

Sir Edwin Arnold (1832-1904) は英国出身の新聞記者、随筆家、宗教学者、詩人で、1889年に来日した。彼の *Japonica* (1892) は、非常に好意的に日本の文化や風習、宗教観や風景を記録している。アーノルドの日本の「匂い」についてのコメントは、Lafcadio Hearn (1850-1904) が *Kokoro* (1896) 収録の“The Genius of Japanese Civilization”の中で“Critics have tried to make fun of Sir Edwin Arnold's remark that a Japanese crowd smells like a geranium-flowers. Yet the simile is exact”(Hearn 31) と記録している。このエッセイでハーンは、Basil Hall Chamberlain (1850-1935) もまた、‘a Japanese crowd is the sweetest in the world’ と述べていたと記している (Hearn 30)。また、アーノルドは日本の「匂い」について、次のようにも述べている。

[M]ark well how the people frequent the *furo-do*; they are the greatest lovers of “the tub” in the world, and indubitably the cleanliest of all known people. A Japanese crowd has no odor whatever, and your *jinrikisha*-man perspires profusely without the smallest offence to the nicest sense of his fare close behind. True, they wear no underlinen, and put on the same *kimono*, *fundoshi* and *juban* after the bath; but these articles of clothing are also constantly being washed. (Arnold 52)

図らずも、ビゴーが前作で不満を爆発させた人力車夫を例に挙げ、好意的に日本人の「無臭」について書かれた文章であることが面白い。

6. “The Jápán ‘Ead.” 「ニッポン・ノイローゼ」

日本に住む英国人の友人がノイローゼになる。彼は繰り返す波の動きや自分のシッポを追いかける野良猫を見ては、反復動作の変化の無さこそ正しいのだと主張する。心配した語り手は友人に帰国をすすめる。

When he 'gins to ax you frequent “Whether life is worth the livin'?”

(Which a certing bloke as writes did write a book,)

And in the 'usky hunder-tone of one by shaveling shriven

Confides the whole blamed thing is on the crook;—

It ain't a bit of good for to make it hunderstood

That *Life depends hentirely on the liver*,

For he's deaf to argyment, and he doesn't care a cent,

An' he swears to chuck 'is corpse into the river. (ll.9-16)

奴が「人生は生きるに値するか」と度々君に尋ねはじめたら

(どっかの奴がそれで本を書いたようにな)

罪の告白をうけた聖職者のような低い声で

非難されていることの全ては自分のせいだなんて言いはじめたら

「人生は肝臓にかかっている」なんて

冗談で納得させようとしても無駄

なぜなら奴は聞く耳も持たず 端金にも興味がない

奴は断言する 川に飛び込んで死んでやると

「人生は生きるに値するか」という冒頭の言葉は、英国の小説家 William Hurrell Mallock (1849-1923) の著書 *Is Life Worth Living?* (1879) からとったものである。同タイトルで1896年に本を出版した William James (1842-1910) は西田幾多郎や夏目漱石にも影響を与えた米国の哲学者であるが、自著の冒頭で‘When Mr. Mallock’s book with this title appeared some fifteen years ago, the jocosé answer that “it depends on the *liver*” had great currency in the newspapers’(James 5) と述べている。ビゴーも度々耳にしたフレーズであったのだろう。しかし「人生は肝臓にかかっている」、つまり「酒でも飲んで忘れよう」という語り手のせっかくのアドバイスも、ノイローゼの友人には届かない。17行目から20行目の‘When he slinks around a-shiverin’ an’ talks like Percy Shelley / Of burglars bold a-layin’ for ‘is life, / An’ whispers ‘ow the night before he ‘ad ‘is bloomin’ belly / Ripped open with a rough-edged kitchen knife’ (奴は震えながらコソコソ逃げ回り / パーシー・シェリーみたいに / 命を懸けた大胆な盗人たちの話しをする / 膨らんだ腹がギザギザのキッチン・ナイフで切り裂かれる / その前の晩について囁き声で話すんだ) は、おそらくシェリーの代表作 *Prometheus Unbound* (1820) にもうたわれた、神々を欺き人間に火を与えたために罰せられるプロメ

テウスを指しているのであろう。一作目の“Over Educated.”において、‘We’ve teached thim folkses various kinds o’ stuff (l. 25) とあるように、日本人に多くのことを教えてきた英国人が感謝されないばかりか、ノイローゼになってしまったのならば、ノイローゼの友人は正にプロメテウスそのものである。ギリシャ神話のプロメテウスは岩山に縛られ、日々「肝臓」を鷲についばまれる。「腹がギザギザのキッチン・ナイフで切り裂かれる」とは、これを準えたものであろうか。語り手は「ニッポンでノイローゼになるくらいなか死んだ方がましだ」と言い切る。

IV. 結び

日本人の変わりゆく様を嘆くビゴーの6編の詩は、「バラッド」と題されながらも、その形式は英国バラッドとは程遠い。しかし、その形式・内容ともに極めてブロードサイド・バラッド的である。“Ballad of a Company.”の7行目で無能な経営陣を怯ませる語り手の‘défaced type’に、かつてのブロードサイド・バラッドの粗悪な印字を重ねることは、また、“Them Companies!”に登場する“Darling Nelly Gray”のメロディをブロードサイド・バラッドの‘tune’の代用であると考えすることは、単なる深読みであろうか。ビゴーと同時期に日本にいたハーンは、日本にブロードサイド・バラッドの文化が存在したことを感動を込めて記録している。¹³その日本を舞台にビゴーは英国のブロードサイド・バラッドを再現した。言い換えるならば、バラッド文化を培ってきた欧州から遠く離れた日本で、厳密なバラッドの形式にとらわれることなく、バラッド的なものを自らの作品にとり込んだのである。*Yokohama Ballads* は、バラッド文化が日本において再生された貴重な一例であると言えよう。

注

1. 山梨は「『横浜バラッド』の刊行年に関しては諸説あったが、英字新聞『ジャパン・ウィークリー・メール』*The Japan Weekly Mail*の一八九二年十一月五日の記事にこの詩画集の出版が伝えられているので、一八九二年の刊行であることは明白である」(87)と指摘している。
2. 清水は「ビゴーはタールベのリアリズム精神、ドーミエの諷刺精神、そしてユゴーの『基本的人権を尊重する社会の実現』という理想を持って日本にやってきた」と指摘する。(清水編著『ビゴーの150年』64)。
3. 清水は「ドーミエが描いてビゴーが描かなかったのは『青踏派の女性』シリーズぐらいかもしれない」と指摘している。(清水『ビゴーの150年』62)。
4. この『パンチ』がワーグマンによって幕末の日本で創刊されビゴーも深く関わることになった *The Japan Punch* の創刊に繋がる。ちなみに、ビゴーに大きな影響を与えたドーミエには、『パンチ』のキャラクターのモデルとなった英国の人形劇 *Punch and Judy* を描いた *Political puppets* (1850) と題された作品がある。
5. ビゴーは、自らが主宰する雑誌の他、『ジャパン・パンチ』(1862年創刊、月刊化は1874年から)、『団団珍聞』(野村文夫によって1877年創刊)、『改進黨新聞』(改進黨系新聞、1884年よりこの名称で刊行)、*Le Monde Illustré* (1857年創刊、フランスの週刊新聞、ビゴーの寄稿は1887年から)、*The Graphic* (英国で1869年に創刊された週刊新聞) などへ寄稿している。

6. 以下、各雑誌の特徴については、清水勲著『明治の諷刺画家・ビゴー』、『ビゴーが見た明治ニッポン』、清水勲編著『ビゴー「トバエ」全素描集』を参照した。
7. Skeaping は次のようにも述べている。'Broadside ballads were the pop songs of their day. Churned out in their thousands by anonymous hacks often working from dingy rooms at the back of print shops, they were whistled and sung in all walks of life, as likely to be bought for domestic entertainment as pasted up on a tavern wall. Some were eventually to find their way into the libraries of antiquarians like Samuel Pepys and the Earl of Oxford; countless others ended up as book-liners, fine lighters or toilet paper.' (6).
8. 'Textbook history is so often a matter of great names and dates and ruling monarchs. The broadsides show us a *living* history' (Shepard 54).
9. 旧字体は全て新字体に変更。
10. *Yokohama Ballads* からの引用は全て「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」に拠る。
11. 実際の「ガゼット」は読者を多く抱え56年間存続した。(鈴木「幕末・明治期の欧字新聞と外国人ジャーナリスト」)
12. 'He speaks of every kind of theme, rakes up Shakspearean ghosts' (l. 35).
13. "Ballad customs seems to be the same in all parts of the world" (Hearn *The Life and Letters* 221).

Works Cited

- 岩崎久美子. 「フランス図書館行政の近代化」. 『国立教育政策研究所紀要』第137集, 2008, www.nier.go.jp/kankou_kiyou/kiyou137-15.pdf.
- 蛭原八郎. 『日本欧字新聞雑誌史 (復刻版)』. 名著普及会, 1980.
- 岡田俊平. 「明治期の経済発展と銀本位制」. www.seijo.ac.jp/pdf/faeco/kenkyu/030/030-okada.pdf.
- 酒井忠康. 「ジョルジュ・ビゴー再考を機に」. 『ビゴー素描コレクション1 明治の風俗』, 岩波書店, 1989.
- 清水勲. 『ビゴーが見た日本人』. 講談社, 2001.
- . 『ビゴーが見た明治ニッポン』. 講談社, 2006.
- , 編著. 『ビゴー「トバエ」全素描集』. 岩波書店, 2017.
- , 編著. 『ビゴーの150年—異色フランス人画家と日本』. 臨川書店, 2011.
- . 『漫画の歴史』. 岩波新書, 1991.
- , 編著. 『明治の面影・フランス人画家: ビゴーの世界』. 山川出版社, 2002.
- . 『明治の諷刺画家・ビゴー』. 新潮社, 1978.
- 鈴木信太郎. 『フランス詩法 (下)』. 白水社, 1954.
- 鈴木雄雅. 「幕末・明治期の欧字新聞と外国人ジャーナリスト」. 『コミュニケーション研究』第21号, 1991. pweb.cc.sophia.ac.jp/s-yuga/Article/1991a.htm.
- 茂木正治. 「新聞・雑誌漫画にみる批判・反骨・ユーモア—近現代日本の諷刺画を手掛かりに—」. www.lib.hit-u.ac.jp/pr/tenji/kikaku/2017/pdf/lec20171117_1.pdf.
- 柳澤花七絵. 「19世紀フランスの挿し絵入り新聞における日本イメージ」. 『リテラシー史研究』, 2012, RiterashishiKenkyu_5_Yanagisawa.pdf.
- 山梨淳. 「ジョルジュ・ビゴーと明治中期のカトリック教会」. 『日本研究』, 2010. 202.231.40.34/jpub/pdf.
- ワーグマン, チャールズ. 『復刻版ジャパン・パンチ』第9巻. 雄松堂書店, 1975.
- Arnold, Edwin. *Japonica*. Charles Scribner's Sons, 1891.
- Bigot, Georges. *Yokohama Ballads*. 早稲田大学図書館古典籍総合データベース. archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08_c1298.

- Carlyle, Thomas. *Latter-Day Pamphlets*. Chapman and Hall, 1850. archive.org/details/latterdaypamphle00carlrich/page/n3.
- Friedman, Albert B. *The Ballad Revival: Studies in the Influence of Popular on Sophisticated Poetry*. U of Chicago, 1961.
- Hearn, Lafcadio. "The Genius of Japanese Civilization". *Kokoro: Hints and Echoes of Japanese Inner Life*. The Riverside Press, 1896.
- . *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*, vol. II. The Riverside Press, 1906.
- James, William. *Is Life Worth Living?* archive.org/details/islifeworthlivin00jameuoft/page/n7.
- Polak, Christian, and Hugh Cortazzi, editors. *Georges Bigot and Japan, 1882-1899: Satirist, Illustator and Artist Extraordinaire*. Renaissance Books, 2018.
- Shepard, Leslie. *The Broadside Ballad: A Study in Origins and Meaning*. Herbert Jenkins, 1962.
- Skeaping, Lucie, editor. *Broadside Ballads: Songs from the streets, taverns, theatres and countryside of 17th-century England*. Foreword by Andrew Motion, Faber Music, 2005.
- 'Reunion: A Musical Epic in Miniature'. civilwarmusical.com/about-the-music/act-i-songs/darling-nelly-gray.

(みやはら まきこ：英語学科 准教授)

